

前齋宮の恋愛に対する禁忌意識と政治的思惑

——『宋花物語』 当子内親王密通記事の検討を中心に——

林 優 衣

はじめに

齋宮とは、天皇に代わって伊勢神宮に奉仕する未婚の皇族女性をいう。天皇の代替わりごとに候補となる内親王もしくは女王のなかから一人が卜定され、基本的にはその天皇一代の間神に仕えることとなる。

齋宮はその天皇の讓位・崩御、齋宮の親族の死による服喪によって交代するが、齋宮となった女性は不憫な生涯をおくることが多い。例えば、聖武天皇皇女の井上内親王は齋宮退下後に光仁皇后となるが、天皇を呪詛したとして廃され、幽閉されたのちそのまま獄死した。こうまで悲劇的な例は他に

はみられないが、前齋宮はいずれも様々な形で齋宮であったが故にもたらされる行動の制約を受けている。本稿では、それらの制約のなかでもとくに齋宮退下後の恋愛面に注目し、齋宮を経験した女性の恋愛に対する周囲の人々の禁忌意識と政治的な思惑との関係性について考察したい。

婚姻が恋愛を前提としているとは必ずしもいえず、婚姻には女性の側に、相手に対する恋愛感情あるいは肯定的感情、あるいは逆に特別の好意を抱くことのない受け入れ、さらには拒絶したい気持ちを隠しての受諾など、何らかの感情が伴う。しかし本稿では、前齋宮の恋愛に向けられた視線を問題にするので、便宜上、「恋愛」の語を用いることとする。

制度上、前齋宮の恋愛は禁止されておらず、齋宮を退下し

た後に入内・降嫁した人物もいる。入内した齋宮は、先述の光仁皇后井上内親王はじめとして、桓武妃酒人内親王・平城妃朝原内親王・村上女御徽子女王・光厳妃懼子内親王の五人、降嫁した齋宮は、藤原師輔室稚子内親王・藤原教通室博子女王の二人である。

しかし一方で、実らなかつた恋もある。芝野眞理子氏は「単にその娘時代のある時期、齋宮、齋院の職にあつたのだと考えられている場合もあるが、いったん神に奉仕する立場にあつたものは、たとえ退下してもその立場を守りぬかねばならないと考えられて、そのことが彼女らの人生、とりわけ結婚という場合に大きな影響を与えた」として、齋宮を退下したにもかかわらずかつての立場を持ち出され、その恋愛を阻まれる風潮もやはり存在すると述べている。^{〔1〕}

歴史上、前齋宮の実らなかつた恋のひとつに、三条天皇（以下、本論中での表記を統一するため、三条天皇讓位後でも「三条天皇」と表記する）の齋宮当子内親王と藤原道雅の密通が挙げられる。本稿において検討作業の中心とするのは、この恋愛の顛末について、それがどのように記録されたのか、記録に秘められている価値観・意図の検討である。それに基

づいて前齋宮の恋愛に対する制約の実態と記録のされ方との関係性を明らかにしていきたい。

当子内親王と藤原道雅の密通の経緯を、『宋花物語』に沿って簡潔に確認しておく。

当子内親王が帰京してから、彼女のもとに藤原道雅が通つているという噂が立つた。この噂が三条天皇の耳にも入ると、これは乳母のはからいに違いはないとして三条天皇はたいそう立腹し、乳母は暇をだされた。この一件で、三条天皇の病状はさらに悪化したように感じられるほどであつた。当子内親王は齋宮を退下した後であるため、必ずしもその恋愛は憚られることではないが、三条天皇の怒りは傍の者がいたたまれなくなるほどであつた。当子内親王は心を痛めて、ついには自ら髪をおろしてしまつた。

当子内親王は三条天皇第一皇女、母は左大将藤原濟時の娘城子で（系図一参照）、寛弘八（一〇一一）年の三条天皇即位に伴つて内親王宣下を受けた。長和元（一〇一一）年に齋

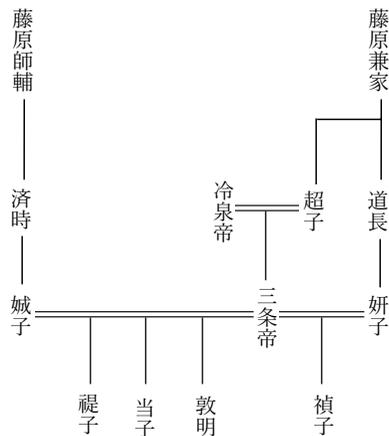
宮となるが、同五（一〇一六）年に三条天皇が讓位したため、齋宮を退下し帰京した。三条天皇は寛仁元（一〇一七）年に崩御し、同年当子内親王は出家した。なお、当子内親王の出家の事情については、史料によって相違がある。²⁾

道雅は非参議従三位かつ中関白家出身であり家柄も悪くはないが（系図二参照）、当子内親王との関係が三条天皇の怒りに触れることとなった当時においては、中関白家は凋落し、その後の摂関家の主導権は、道長家に移っていた。

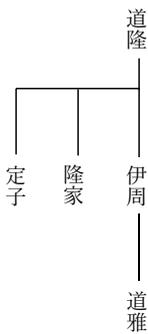
前齋宮が降嫁した前例がないわけではないにもかかわらず、なぜ三条天皇は激怒したのか。『栄花物語』では三条天皇の怒りのさまが執拗に描かれており、単純に前齋宮という身であるが故に恋愛が許せなかったための怒りとは捉え難いのではないか。また、三条天皇はふたりの仲を決して許さなかったが、それに対して道長家の意向がどう働いていたのかも興味深い。

『栄花物語』を軸に三条天皇の怒りの原因を探りつつ、三条天皇没後に当子内親王が道雅に降嫁する可能性はあったのかについても考察していきたい。

系図一 三条天皇関係系図



系図二 中関白家略系図



第一章 齋宮の恋愛・密通の事例

第一節 前齋宮の恋愛を禁忌とする考え

まずは、一般的に前齋宮の恋愛がどう捉えられていたのかを明らかにするために、齋宮または前齋宮の恋愛・密通の事例を検討していく。

『十訓抄』五ノ十には花山天皇の齋宮済子女王と野宮警護の武士平致光の密通記事がみえる。続いて五ノ十一には当子内親王と藤原道雅の密通記事が描かれる。このふたつの記事から齋宮在任時と齋宮退下後の比較が可能であろう。

史料1 『十訓抄』五ノ十

寛和の齋宮、野宮におはしけるに、公役滝口平致光とかやいひけるものに名立ち給ひて、群行もなく、すたれ給ひけり。
それより野宮の公役はとどまりにける。

史料2 『十訓抄』五ノ十一

三条院皇女、前齋宮も道雅三位にあひ給ひて、世の人知るほどになりければ、御髪おるし給ひにけり。三位、帥内大臣の御子なれば、致光には似るべきにあらねども、すべてあるまじき御振舞なり。

現役の前齋宮であった済子女王は、この密通が原因で群行(伊勢下向)することなく齋宮を廢された。道雅の密通については齋宮在任中ではないことと、ふたりの身分について比較して、「致光には似るべきにあらねども」としながらも「あるまじき御振舞」としており、前齋宮の恋愛は禁忌とする考えが示されている。

『源氏物語』には、朱雀院と秋好中宮(あきこのむちゆうぐう、朱雀天皇の齋宮、退下後冷泉天皇の女御、のち中宮となる)の恋愛が描かれる。朱雀院は自身の齋宮であった秋好中宮に想いを寄せていたが、齋宮退下後に秋好中宮は冷泉天皇に入内してしまう。このときに朱雀院が秋好中宮に贈った歌では、「別れの御櫛」を行ったふたりが一緒になることを

神が許さなかつたのだとしている。³⁾

前齋宮であることを理由に悲恋に終わつた文学作品がつくられてゐること、前齋宮の降嫁の事例が先に述べたように二例に限られることからみて、やはり前齋宮の恋愛を好ましくないものとする考えは一般的に存在したと考へて良いだらう。

第二節 『伊勢物語』にみる齋宮の密通

『伊勢物語』は齋宮の密通が取り上げられた最も著名な作品である。第六十九段「狩の使」には清和天皇の齋宮恬子内親王と在原業平の密通が描かれる。ゆえに『伊勢物語』の題名の由来であるともいわれる。

史料3 『伊勢物語』第六十九段「狩の使」

二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ざねとある人なれば、遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた、寝られざりければ、外

の方を見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬにかへりにけり。男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか

男、いといたう泣きてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢つつつとは今宵
さだめよ

とよみてやりて、狩にいでぬ。

この話について研究者の間では史実説と虚構説ふたつの立場があるが、⁴⁾『伊勢物語』の古注類はこの話を真実とし、高階氏系図・本朝後胤紹運録などには恬子内親王と業平の子までが載せられている。実際、以下にみるように、『栄花物語』

では史実と前提した叙述となっている。

『伊勢物語』は齋宮在任中の密通を描いており、当然その行為は非難されるものであるはずだが、作中にそのような二ユアンスはみられない。あるのは男と女の逢瀬は人目をばかるべきだという考えのみである。しかし、これ以後につくられた物語において、齋宮の恋愛を描く場合に、『伊勢物語』を想起させるものは多い。この点から、恋愛と禁忌の結びつきが作品をいっそう盛り上げる要素になると捉えられていたことは間違いない。敵密には禁忌の恋愛とまでいえない前齋宮の場合においても、恋愛が禁忌であるように描くことで作品をいっそう盛り上げることができる。勝亦志織氏は、物語上の前齋宮について「禁忌の恋の相手として造型されつつも、実際には小事で終わる相手」として描かれると指摘している。⁽⁵⁾

ところで、『伊勢物語』第六十九段は、女性が男性を訪ねるといふ特殊な形をとっており、榎村寛之氏はこの章段を天皇による齋宮の発遣儀礼の再現とみている。⁽⁶⁾ 齋宮の発遣儀礼は、齋宮が女性たちを先に立て、夜に大極殿の平座で待つ天皇のもとを訪れる形式をとる。この章段では、齋宮が女童を

先に立て、夜に寝床（平座）で待つ在原業平（天皇になる可能性のあった男）のもとを訪れるシーンを描いており、氏はここに発遣儀礼の反映をみている。

齋宮の密通が、時に王権と結び付けて考えられていた可能性に留意しておきたい。

第三節 前齋宮の降嫁を可能とする条件

朱雀天皇の齋宮で醍醐天皇皇女の雅子内親王と藤原時平の子藤原敦忠は、雅子内親王が齋宮に卜定される以前から親密な関係であった。これは、『敦忠集』に卜定以前のふたりのやりとりが残されていることから明らかである。しかし、齋宮になる条件は未婚の皇女であるため雅子内親王がふさわしいとは思えない。雅子内親王の齋宮卜定は不自然に行われており、この点について、久徳高文氏は「敦忠との恋を潰そうとする力、敦忠が皇女の婿になることを不利益とする力が、はたらいていたとしか思われない。藤原家内部に暗く澁む派閥次元の政治的策謀のあらわれなのである」と述べる。⁽⁷⁾ 齋宮の卜定には度々このような政治的介入がみられる。

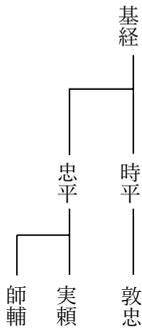
結局、承平六（九三六）年、雅子内親王は母の喪によつて

四年ほどで退下し、ふたりの関係は復活した。前斎宮である雅子内親王と敦忠との関係を批判するような史料はとくにみられないものの、結局、雅子内親王は藤原師輔に降嫁する。詳細な記録が残っていないためその経緯は明らかでないが、師輔は忠平の子でありその身分・立場が摂関家傍系である敦忠に優っていたことはいうまでもない(系図三参照)。

師輔は承平五(九三五)年に二十八歳で参議従四位下、敦忠は天慶二(九三九)年に三十四歳で参議従四位上となつて

いる。師輔室勤子内親王は天慶元(九三八)年に薨去しており、雅子内親王と師輔の結婚はそのあとになる。結婚を同二年と仮定すると、師輔は権中納言従三位でやはりその差は歴然である。また、父忠平はこのとき摂政・太政大臣従一位であつた(以上、「公卿補任」より)。父親の権威も含めて降嫁には申し分のない立場であろう。雅子内親王の師輔への降嫁

系図三 敦忠と師輔略系図



には、前斎宮を傍系に渡したくないという政治的思惑も絡んでいた可能性が高い。

また、師輔のちに康子内親王との私通において、「御おぼえのかぎりなきによりて」お咎めなしとなつている。師輔ほどの地位があれば、前斎宮との恋愛に難色を示す者はあらわれないのだろう。つまり、前斎宮の降嫁において、相手の社会的地位が重要な役割をしめていたと結論できよう。

第二章 皇女降嫁への三条天皇の期待

先に前斎宮の恋愛の成否は相手男性の社会的地位によって左右されることを確認した。では、当子内親王の場合はどうか。非参議従三位の道雅は前斎宮が降嫁するのにふさわしい身分であつたのだろうか。当子内親王密通事件以前に降嫁した前斎宮は藤原師輔室雅子内親王のみである。結論を出すのに師輔と道雅を比較するだけでは不十分であろう。当子内親王は前斎宮である以前に内親王である。そこで、まずは皇女の降嫁の事例をみていきたい。

継嗣令によって内親王の結婚は制限されており、この規定

表一 皇女降嫁時の官位

兼家	顕光	師氏	師輔			名前
保子	盛子	靖子	康子	雅子	勤子	皇女
寛和二? (九八五)	貞元二? (九七七)	延長八頃 (九三〇)	天曆九 (九五五)	天慶二? (九三九)	天慶元 (九三八)	容認年
右大臣 摂政正二位	権中納言 従三位 正三位	従五位下 (延長六)	右大臣 従二位	権中納言 従三位	権中納言 従三位	官位
天徳四没 (右大臣正二位)	関白 太政大臣 従一位	撰政 左大臣 正二位	天曆三没 (関白太政大臣従一位)	撰政 太政大臣 従一位	撰政 太政大臣 従一位	父の官位
時期不明 『栄花物語』によると寛和二年この年外孫皇太子踐祚	時期不明。 所生重家の生年は貞元二年。 この年異例の加級。	延長八年に内親王宣下、おそらく結婚はこのあと。	『大鏡』裏書「同九年配右大臣」	第一章第三節参照。	『一代要記』「天慶元年配中納言師輔」	備考

容認時の父の官位。父がすでに没している場合、没年の官位を（ ）で示した。

表一 道雅の経歴

年	歳	官位
長和五(一〇一六)	二十五	非参議 従三位 左近中将、伊予権守
万寿三(一〇二六)	三十五	非参議 従三位、伊予権守、左近中将、右京権大夫
長暦二(一〇三八)	四十七	非参議、従三位、右京権大夫、丹波権守
寛徳二(一〇四五)	五十四	非参議 従三位 左京大夫
永承六(一〇五二)	六十	非参議 従三位 左京大夫、備中権守
天喜二(一〇五四)	六十三	七月十日出家 同二十日没

が緩められてもなお降嫁は認められていなかった。賜姓源氏以外で藤原氏に降嫁した皇女は勳子・雅子・康子・靖子・盛子・保子の六例あるが、いずれも帝・先帝による降嫁の裁可はなく、のちに容認されている。

表一は皇女降嫁時における配偶者の官位をまとめたものである。師氏を除いて、皆参議従三位以上である。表二に道雅の経歴をまとめたがその官位の差は明らかである。次に、皇女降嫁時の父親の立場をみていく。軒並み正二位以上、さらに摂政・関白にしている者たちばかりである。降嫁時の自身の官位が低かった師氏も父親忠平は摂政・左大臣・正二位で高い位についている。それに対して、道雅の父伊周は花山

院暗殺未遂事件、東三条院呪詛の噂によって長徳一(九九六)年に大宰権帥に左遷されていた。翌年に召還されたとはいえ、その身はもはや今後の栄達を望めない立場であった。よって、道雅は自身の立場と中関白家の立場、いずれからしても三條天皇から降嫁の容認を得るのは難しい地位にあった。

一方、三條天皇は即位して以来、敦成親王の早い即位を毛くろむ道長に圧迫され続けていた。長和四(一〇一五)年、三條天皇は第二皇女の禊子内親王を藤原頼通に降嫁させようとした。この年、頼通は二十四歳で権大納言正二位・春宮権大夫・左近衛大将の地位にあった。この縁談について藤原実資は次のように強烈に批判している。

史料4 『小右記』

・長和四年十月二日条

主上密々被仰云、日来左大臣頻責催讓位事、太奇事也、又云、当時宮達(敦明・敦儀・敦平・師明親王)不可奉立東宮、依不可堪其器、故院三宮(敦良親王)足為東宮者、於吾前所定如此、左右思慮何為、至今讓位事都思留了、

・長和四年十月十五日条¹⁰

主上以女二宮（禊子内親王）可合權大納言頼通之由、被仰左相府、但有妻如何、相府申云、至有仰事不可申左右者、御差間深依倉給實位思食事、恐偏有御好欵、可悲々々、可弹指々々、

・長和四年十一月十五日条

左大将可被合女二宮之事、更不可知、雖有仰事、不申左右、大将妻母尼聞之、水漿不受、流淚悲泣云々、者主上思立事也、所被仰之例、故北宮例云々、奇也、恠也、邑上先帝不知食之事也、李部（敦明親王）可立給太子之御計云々、

三條天皇は、道長が東宮は敦良親王にすべきと進言したことに對して立腹し、讓位の意向を撤回した（十月二日条）。実資は、その数日後に持ち上がった禊子内親王と頼通の縁談について、病悩のなかで在位期間を延ばすため（傍線部）であるとして、もしくは敦明親王を立太子させるための策略との噂を記して（傍線部）批判している。

三條天皇は、禊子内親王の降嫁を通して道長との關係を良

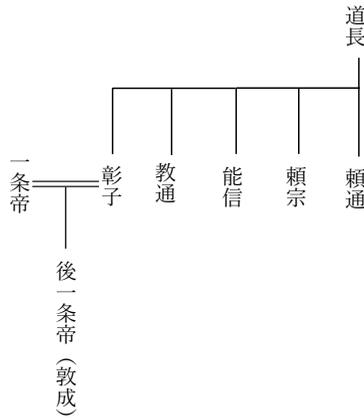
好にすることによって、自身ならびに道長女妍子所生の禊子に比べ弱い立場にあつた禊子内親王が尊重されることを狙つたが、破談に終わった。ところで、傍線部は醍醐天皇皇女康子内親王と藤原師輔の降嫁についての記述である¹¹。

ここから、皇女降嫁における帝・先帝の裁可の有無についての関心がうかがえる。また、帝・先帝が皇女の父親でない場合でも裁可の有無を気にするようである。皇后腹皇女である禊子内親王が父帝の裁可を得た上で降嫁したとすれば、その男性貴族は大きな恩義を三條天皇から頂いたということになる。三條天皇はそれを見越したうえで道長にこの提案をしたのであろう。

このように、三條天皇は禊子内親王の降嫁を考えていたのだから、齋宮退下後の当子内親王の降嫁先も考えていたと推定される。当子内親王の場合、皇后腹皇女である上に父先帝の裁可有りとなれば、さらに前齋宮の肩書もあるので、道長に取り入るうえで禊子内親王の場合以上に有効な手札となり得る。三條天皇の讓位に伴い当子内親王が齋宮を退下した長和五年時点の、二十代で従三位以上の公卿は頼通（權大納言正二位）、教通（權中納言、正二位）、頼宗（權中納言、従二

位)、能信(非参議、從三位)の道長の子四人(系図四参照)と道雅で合わせて五人いる。道長の子息に当子内親王も降嫁させる心つもりだった可能性は十分考えられる。

系図四 後一条天皇と道長の関係系図



では、当時の貴族たちにとって、前斎宮の密通はどれほどの関心事だったのだろうか。

『御堂関白記』中でこの当子内親王密通事件に関する記述は、「或者、相示して云く、道雅中将に先の斎宮嫁するにより、中務親王(敦儀親王)迎へ取りて、皇后宮に参ると云ふ。

其の乳母道雅に至ると云々」(寛仁元年四月十日条)と「内に参る。又院(三條)に参る。仰せられて云く、先の斎宮、道雅がために婚せられると云々、通任を召し遣はし、案内を問はしむ、暫らく候し、案内を聞こゆべし、てへり。候す。通任還り参る。申す所の事、甚だ以て異様なり。尻口無し。相公本より覚えざる中、件の甚だ奇なる事、実か」(寛仁元年四月十一日条)の二回である(読み下し文は『御堂関白記全註釈』による)。その内容は、「ある者に会ったとき得た情報によると、道雅中将と先の斎宮の関係ができていたという。先斎宮は中務親王が迎えに行つて皇后のところへ参上した。乳母が(二人を取り持つために)道雅のところに行つたという」「先斎宮と道雅の関係について、藤原通任を遣わして事情を聴取させた。その様子はしどろもどろで要領を得なかつたという」というものだ。通任の報告から、道長は「相公らももとより関知していないなか、いったい、このはなはだ奇怪な話は本当のことなのだろうか」と事件そのものに懐疑的になっている。これらの記述から、この密通事件を三条天皇のみがことを大事にしているように感じられる。『御堂関白記』では、右に挙げた二つの記事以降、密通事件の記事がみられないこ

とから、道長はこれ以降、事件に深入りしなかったと考えられる。

『小右記』では、この密通事件について記されていない。

ところで、『小右記』には、花山天皇の齋宮濟子女王についての記述がある。第一章第一節で取り上げたが、濟子女王は滝口武者平致光との密通によって群行（伊勢下向）をしないまま齋宮を退下した女性である。しかし、彼女について『小右記』には卜定の記事のみが記され、密通については触れられていない。

そもそも彼らの日記中に齋宮（前齋宮）に関する記述は少ない。例えば卜定・群行（伊勢下向）などの行事が記録されている程度だ。貴族たちは、誰が齋宮に立てられるべきかについて決して関心がなかったわけではないが、伊勢国という遠い地の情報はそうそう入ってくるものではないから、と齋宮在任中の記述が少ないことについてはそれなりの理由が考えられる。それに対して、前齋宮は京にいるにもかかわらずその記述がほとんどないのは、そもそも前齋宮についてほとんど関心を向けていなかったからであろう。実際、『小右記』には濟子女王・恭子女王・当子内親王・嬪子女王の四人の齋

宮が登場するものの、齋宮退下後の動向が記されるのは当子内親王が出家したという事実についてのみである。¹²⁾

第三章 『栄花物語』における

当子内親王密通記事の特徴

第一節 三条天皇の怒りの記述

以上をふまえて、『栄花物語』の当子内親王密通記事あらためてみていく。

史料5 『栄花物語』巻第十二「たまのむらぎく」

異事ならず、齋宮の御乳母、やがてかの宮の内侍になされたまへりし中將の乳母の仕業なるべしとて、院いみじくむつからせたまひて、やがて永くまかでさせたまひつ。院には、いとどしき御心地に、これを聞しめししより、いとどまさらせたまふやうに思されて、宮たちを隙なう御使にて、皇后宮（嬪子、当子内親王母）と内とのほどの御消息いみじうしきりなり。齋宮われにもあらずいみじう思さる。中將の内侍は、やがて逐はせたまひ

しままに、かの道雅の君迎へとりて、わが御もとにいみじういたはりて置きたりと聞しめす。さて院には、皇后宮めざましう思しめされて、人知れずいみじう思し嘆かせたまへど、まことそらごと知りがたき御事なれど、世にかく漏り聞えたるに、院の御気色のいといみじきなり。かの在五中将の、「心の間にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。それはまだまことの齋宮にておはせしをりのことなり。されど、これぞ前の齋宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど、院のいときはだけく思しのためはするが、いとかたはらいたきになん。皇后宮いといみじう思し乱れたるに、宮々の御気色もいといみじきに、東宮もいみじく心やましげに思し乱るべし。

三条天皇の怒りの記述部分に傍線を付したが、怒りの記述は傍線部からの通り四回もあり、尋常でない怒りの様子を描いている。このとき当子内親王は前齋宮であり、「あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど」というとおり、恋愛が禁止されているわけではない。それにもかかわらず三条

天皇がこれほどまで激怒した理由について原楨子氏は、道雅が恬子内親王と業平の不義の子である高階氏の子孫だからであるとしている¹⁵⁾。それだけが理由なのだろうか、また、この段の創作意図をどのように読み取ってよいのだろうか。

ところで右に引用した文中では、三条天皇の怒りだけではなく三条天皇の病悩について、さらには皇后宮・宮たち・東宮の悩みにまで言及している。彼らの悩みについては、ことの経緯を述べる上で必ずしも必要とは感じられない。作者が、この経緯を述べるのとは別の意図をもって書き込んだと考えられる。そもそも巻第十二の主題は後一条天皇（系図四参照）の即位であり、この巻には、後一条天皇即位の正当性を読者に印象付ける執筆意図が秘められている可能性が高い。三条天皇が取り乱し、度を越えた怒りを爆発させたことによつて、周辺の人たちまでいたたまれず思い悩むまてになつてしまった、と退位後の三条天皇の哀れな姿をことさらに強調し、三条天皇との対比によつて後一条天皇の栄花をより際立たせる意図があるのではないか。

また、波線部のように途中に『伊勢物語』第六十九段の引用が入る。ここには、三条天皇の理不尽な怒りについて擲掄

する以上の意味があるのではないか。先に述べた通り、齋宮の密通は王権と結び付けて考えることもできる。井上真衣氏は、天皇の権威にとつて重要な役割を担っていた前齋宮を臣下に奪われる形式が、三条天皇の権威に否定的なイメージを抱かせるとしている。¹⁶ そもそも、内親王の私通自体、不名誉なことである。それに加えて当子内親王の場合は前齋宮であり、三条天皇の威光を支える役割を果たすことを期待される女性であったはずである。『源氏物語』では、自らの齋宮であった秋好中宮を手に入れられなかった朱雀院が権威を失う様子が描かれる。つまり、前齋宮は齋宮退下後であつても、自身を齋宮に立てた天皇の権威を象徴し続けるという考えもあつたのであろう。

『栄花物語』は、三条天皇周辺への不安の広がりを叙述することによつて、ことが大事件であつたと印象付けるのみならず、天皇の権威失墜を連想させる業平・齋宮の密通事件を引き合いにして述べている。しかも当子内親王の相手は高階氏の子孫である。作者は、そのような図式を描くことで、三条天皇の権威失墜を象徴的に描いたのだ。

『栄花物語』作者の意図がどのようなものあつたと、この密通事件が、三条天皇にとつて大変不本意なことであつたと自体は事実であらう。

そもそも三条天皇は、当子内親王を齋宮としたとき以来、彼女に少なからぬ期待を持っていた。天皇の娘が齋宮になつたのは村上天皇の楽子内親王以来である。¹⁷ 天皇家の子女が減り、天皇が力をふるえないために齋宮の制度が形骸化してきていた三条天皇の当時においては異例のことであつた。「別れの御櫛」の際、振り返つてはならないという禁忌を犯すほど別れを惜しむにもかかわらず娘を齋宮にしたのは、摂関家への対抗心のあらわれであつたと解釈できる。久徳高文氏は、このときの三条天皇の行動について「その場に列席していた道長に対する痛烈な抵抗感情の発露」であるとしている。¹⁸ 実際、三条天皇は彼女の群行行事準備に関する道長の消極的対応について不快な感情をあらわにしている。²⁰

そんな中、当子内親王は「以我如立齋姫、有志之上、近例不多、当時實位十八年」(『小右記』長和三年六月二十七日条)という夢を見たというのである。この、三条天皇の在位が十八年続くであらうとの予言は実際には外れたが、道長に圧迫

されていた三条天皇にとって、大きな心の支えになったに違いない。また、翌年には「齋宮消息云、伊勢太神宮無恠異御、若可有事時必有恠異、又齋王参宮之間忽有故障、而更不然、仍知治天下良久之由、是宮人等所申也」(『小右記』長和四年閏六月十日条)と前向きな手紙を送っている。このように、彼女は齋宮在任中、三条天皇の在位を支える心の支えとなっていた。齋宮退下後においても、降嫁を通して道長を牽制するための最強の手札になる可能性に、三条天皇は大きな期待をかけていたはずである。それにもかかわらず、その娘によって、三条天皇が自身の権威と面子を大きく傷つけられたのは疑いない。

第二節 「齋宮」表記の特徴

『栄花物語』において、「齋宮」という語彙がどのように用いられているかにも着目してみたい。『栄花物語』中に「齋宮」は四九例あらわれ、そのうちの十一例が当子内親王を対象にしている。

以下に当子内親王に関する記述を抜粋する。

史料6 『新編日本古典文学全集 栄花物語』(小学館、一九九七年)より

- ・ 女一の宮、齋宮にゐさせたまふべき御定めになりぬ。(479ページ)
- ・ このごろぞ、齋宮も野の宮におはしますほど、いとめでたながら、宣耀殿の明暮の御仲らひの、にはかにひき離れさせたまふも、御涙こぼれさせたまへど、いまましければ忍びさせたまふべし。(480ページ)
- ・ 皇后宮の御女一の宮は、齋宮にておはしましにき、(54ページ)
- ・ かかるほどに、前齋宮上らせたまひて、皇后宮のおはします宮は狭しとて、またしらせたまふ所にぞおはしませたまひける。(中略) 齋宮の御乳母、やがてかの宮の内侍になさせたまへりし中将の乳母の仕業なるべしとて、院いみじくむつからせたまひて、やがて永くまかでさせたまひつ。(中略) 齋宮われにもあらずいみじう思さる。(中略) これぞ前の齋宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど、院のいときはだけく思したまはするが、いとかたは

らいたきになん。(89~90ページ)

・かくて前齋宮いと若き御心地に、このこといと聞きにくく思さるれば、いかにせんと人知れず思し嘆かれて、

(95ページ)

・この院も、御処分もなくてうせさせたまひにけり。

(中略)さるべきさまに前齋宮、姫宮など、いみじく数へたてて、(102ページ)

・皇后宮には、前齋宮いとをかしげなる尼にておこなはせたまへば、持仏などさまさまにて奉らせたまふ。中将の乳母はかの三位中将の御もとにと聞しめししかど、今はそこにもなかなれば、あはれに、いかでかいかがと、齋宮は人知れず思されけり。(102ページ)

以上、当子内親王に関して齋宮在任中に「齋宮」が三ヶ所(傍線)、齋宮退下後に「齋宮」が三ヶ所(波線)、「前齋宮」が五ヶ所(二重線)用いられている。

波線部は、本来「前齋宮」と表記されるべきであるが、三ヶ所とも密通に関する記述である点が共通しているようにみえる。つまり単なる脱字ではなく意図的にそう表記したと考

えられる。敢えて「齋宮」と書くことで現役の齋宮が恋愛の禁忌を犯したというミスリードを招く、もしくは密通及び恋愛に関する非難の意味合いをより強くする意図があったと推測する。

また、波線部と同じ状況下での「齋宮」は、当子内親王以外の二人の齋宮でも用いられている。一人目は、後一条天皇の齋宮嬪子女王であり、嬪子女王と藤原教通の婚姻記事「まことや右の大殿はつひに殿の齋宮におはしましそめぬ。」(375ページ)にみられる。嬪子女王の例でも、恋愛に関する部分で使用されている。二人目は白河天皇の齋宮嬪子内親王で、七例みられる。嬪子内親王は齋宮退下後未婚のまま堀河天皇准母として中宮となり女院になるという特殊な経歴をたどっており、このパターン(准母立后)の最初の例となった人物である。よって、嬪子内親王に関しては生涯未婚を貫いた前齋宮として、齋宮のあるべき姿・尊敬の念を示して齋宮退下後も「齋宮」と表記しているのではないかと推測する。

次に他の史料において、前齋宮について、「前齋宮」と表記する場合と在任中・退下後関係なく「齋宮」と表記する場合のどちらが一般的かを問題としたい(表三参照)。

『大鏡』中に「齋宮」は八例⁽²²⁾あらわれ、そのすべてが適切に用いられていた。そもそも、『大鏡』では前齋宮その人について言及する文章がみられない。これは、齋宮は政治に影響を及ぼさないという認識に立ち、政治の推移を語る上では齋宮退下後であればなおさら彼女について特筆する必要があるまいという、筆者の立場からもたらされた結果であろう。

『御堂関白記』中においては、「齋宮」は二八例確認され、そのうち「前齋宮（先齋宮）」は四例みられた。齋宮をあらわす「齋王」が十三例、そのうち「前齋王」は二例であった。そして、全体を通して齋宮退下後にもかかわらず「前」をつけない表記は二例みられた。

表三 その他史料における齋宮の表記

史料名	齋宮(前齋宮)	齋王(前齋王)	その他	退下後「前」なし
『大鏡』	8(0)	0(0)	0	0
『御堂関白記』	28(4)	13(2)	1	2
『小右記』	62(2)	71(0)	12	0

齋宮をあらわす語として、「齋内親王」「齋姫」もみられた。これらはまとめて「その他」としてカウントした。

表記する条もあり、現任の齋宮と前齋宮を明確に区別していると思われる。齋宮退下後に「前」をつけない表記は、当子内親王の帰京を記す長和五年八月八日「是齋王⁽²⁴⁾帰由也」と長和五年八月十日「權左中弁重尹下向齋王⁽²⁴⁾御迎」にみられる。しかし、それに近い八月五日と八月十三日では「前齋宮」と表記している。八月八日、十日条の二例は齋宮退下直後の時点での記事であつて、文脈上からしても「齋王」表記であつても不自然とはいえない。

『小右記』では、「齋宮」は六二例⁽²⁵⁾、そのうち「前齋宮」は二例みられた。齋宮をあらわす「齋王」は七一例であった。そして、全体を通して齋宮退下後に「前」をつけない表記はひとつも無かつた。

以上から、古記録上では現任の齋宮と前齋宮は原則的に区別されているのに対し、『栄花物語』ではこのような区別とは別の意図のもとに「齋宮」と「前齋宮」を使い分けているといえるだろう。当子内親王に関しては他の齋宮に比べて、齋宮であつた時よりも齋宮退下後の記事が多い(表四参照、媯子内親王に関しては、先述の准母立后という特殊な事情による)。「栄花物語」の筆者は、齋宮退下後の当子内親王をク

表四 『栄花物語』における各齋宮の登場語数

名前	在任時	退下後	合計
恭子女王	2	0	2
当子内親王	3	8	11
傅子女王	1	2	3
良子内親王	9	1	10
敬子女王	2	0	2
俊子内親王	2	0	2
淳子女王	2	0	2
媞子内親王	4	9	13
善子内親王	2	0	2

その他、『伊勢物語』引用の際の「齋宮」と、一般の名詞としての「齋宮」が各一語ずつある。

ローズアップし、かつ「齋宮」表記を意図的に用いることによって、彼女の密通事件をあつてはならない非難すべきことだと印象付け、そうすることによって三条天皇の凋落落りを強調したという先の推定の裏付けとなろう。

おわりに

以上、『栄花物語』を中心に同時代史料と照らし合わせながら、当子内親王密通記事をみてきた。(一) 皇女降嫁による摂関家への恩恵授与という思惑、および娘齋宮が退下後も天皇のために果たすべき役割への期待という三条天皇側の事情、(二) 『栄花物語』における「齋宮」の描き方と日記にあらわれる前齋宮の姿の比較、という二側面からみてきた、齋宮を経験した女性への意識と政治的な思惑は、以下のようなものである。

まず、三条天皇は道長による圧迫から自身の尊厳を維持するための助けになるだろうと、齋宮当子内親王に期待をかけていた。当子内親王の齋宮退下後も、皇后腹皇女である上に天皇の権威を象徴する齋宮であったという経歴は、道長に取り入りつつ同時に彼を牽制する上で利用できると考えていた。そのため、三条天皇にとってこの密通事件は非常に不本意であった。

次に、『栄花物語』巻第十二は、三条天皇の権威否定と

もに後一条天皇の栄花を示す意図を持って当子内親王密通記事を描いている。そのため、この記事は、次の二つのことが強く印象付けられる叙述となっている。

密通に対する三条天皇の尋常でない怒りと病惱、それに伴う周辺への不安の波及が示す三条天皇の哀れな姿。齋宮の密通は王権固有の儀礼と結び付けて捉えられていた可能性があり、齋宮はその退下後も天皇の権威を象徴するという考えが潜在的に当時の人々のうちにおいて支配的であった中で、そのことがあらためて想起され、ほかならぬ三条天皇自身の齋宮の密通によって象徴される、天皇の権威失墜。

また、『栄花物語』全体を通して、「前齋宮」であるにもかかわらず恋愛が伴う記事には「齋宮」と記す独特の表記をことさらに用いることによって、前齋宮の恋愛が非難されるべき禁忌であったかのように印象付ける結果をもたらしている。

『栄花物語』は当子内親王の密通を重大な事件として捉えているが、三条天皇を除けば当時の貴族にとつて、前齋宮の密通は噂に上りこそすれ、それほどの大事件ではなかった。日記からみえてきたこの事件の様相は、三条天皇ひとりがつ

るたえる様子であり、道長は噂について不審がりながらも深入りはしなかった。

よつて、前齋宮の恋愛を禁忌として非難し、ことさらに大事件であつたかのように取り上げるといふ感覚は、後世における創作物にほかならない。前齋宮当子内親王の恋愛「事件」とは、物語を盛り上げる要素として、藤原道長家の栄花を誇らんとする『栄花物語』作者の歴史観を補強する役割を担うべく、造形された姿であつたと結論する。

注

(1) 芝野眞理子「前齋宮・前齋院の生涯 その入内と降嫁を中心に」『史窓』三十七号、一九八一年。

(2) 『栄花物語』・『十訓抄』では自分の意志で出家した、『大鏡』では父によって出家させられた、『小右記』では病を得たため出家、と記される。

・『栄花物語』「御手づから尼にならせたまひぬ」

・『十訓抄』「世の人知るほどににらにければ、御髪おろし給ひにけり」

・『大鏡』「三条院も御惱の折、いとあさましきことに思し嘆きて、尼になしたまひてうせたまひにき」

・『小右記』「師通朝臣云、前齋宮依病為尼」

- (3) 「わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲と神やいさめし」『源氏物語』絵合。
- (4) 角田文衛氏は史実説、片桐洋一氏ら国文学研究者の多くは虚構説である。
- (5) 勝亦志織「物語史における齋宮・齋院の変貌」『古代中世文学論考』第十三集 新典社、二一 五年。
- (6) 榎村寛之「齋王の恋」と平安前期の王権 『伊勢物語』狩の使「章段の意味するもの」『古代文化』五六巻一号、二〇〇四年。
- (7) 久徳高文「齋宮の恋 雅子内親王と敦忠」『中世和歌とその周辺』笠間書院 一九八〇年。
- (8) 勝亦志織氏は、師輔もまた、雅子内親王齋宮卜定以前から彼女に懸想していた事実を、『師輔集』所収の師輔・雅子内親王贈答歌により明らかにしている(勝亦志織「『大和物語』における 記録」の方法」『日本文学』六五巻五号、二一 六年)。
- (9) 『大鏡』太政大臣公季参照。
- (10) 大日本古記録では「御恙間深依倉給寶位、思食事恐偏有御好歎」と記載されているが、引用にあたって読点の位置をあらためた。
- (11) 大日本古記録、倉本一宏「現代語訳 小右記7」参照。
- (12) ここでは、『御堂関白記全註釈』に従って、原文の「無尻口」について「しどろもどろで」以下の訳文を示しておいた。「尻口」とは、日本国語大辞典を引くと、まさしく、『御堂関白記』のこの部分の記事を用例とした上で、「も」のこの前と後」という解釈が示されている。これに従うと、道長はここで「首尾が一貫しない」という意で使用していると考えられる。よって、「院は大事のように言い、私に解決をお命じであるが、これではことの收拾先が見えない(埒が明かない)」と述べていると考える。
- (13) 例えば、朱雀天皇の齋宮雅子内親王の卜定について、政治的介入が推測されること(第一章第三節参照)。また、三条天皇讓位(長和五年二月十九日)ことから、ここに道長の介入が推測される。
- (14) 寛仁元年十一月三十日条。前注(2)参照。
- (15) 原榎子「隔てられた恋 齋宮当子内親王と左京大夫藤原道雅」『法政大学大学院紀要』六二号、二〇〇九年。
- (16) 井上真衣「物語における齋宮のモチーフとその効果」『栄花物語』当子内親王密通記事に関連して「詞林」四二号、二一 七年。
- (17) 村上天皇の齋宮染子内親王は三人目の齋宮であり、即位後に生まれた娘である。即位時点で娘を齋宮にした例としては光孝天皇の齋宮繁子内親王があるが、陽成天皇が事実上廢位された直後であるため光孝天皇自身の意思によるか疑問であった。比較対象としては不十分であろう。それ以前では文徳天皇の齋宮晏子内親王以来である。
- (18) 『大鏡』六十七代 三条天皇

「齋宮下らせたまふ別れの御櫛させたまはては、かたみに見返らせたまはぬことを、思ひかけぬに、この院はむかせたまへりしに、あやしとは見たてまつりしものを」とこそ、入道殿は仰せらるなれ。

三条天皇は当子内親王を伊勢に送る際に禁忌を犯している。前例のないことをするのは不吉だとされており、河北騰『大鏡全注釈』（明治書院、二〇〇八年）では三条天皇の早い退位や齋宮密通事件はこれが原因だとしている。

(19) 久徳高文「藤原道雅の恋 齋宮当子内親王をめぐって」『福山文学園大学研究論集』十二号（二）、一九八一年。

(20) 『小右記』長和二年八月十八日

拾遺納言（藤原行成）云、齋宮事不可敢成、公家懇切之仰逐日殊甚、而左府一切不承従、計之有神怒坎、頻有夢想、然而不申相府者、

『小右記』長和二年九月五日

金吾（藤原懷平）云、主上依齋宮事為左府有不快氣、有御夢想者、不能具記、

兩日とも、齋宮の行事についての道長の対応に不快な感情を周辺に吐露する三条天皇を記している。また、八月十八日条から三条天皇が齋宮行事を重要視していたことがうかがえる。

(21) 古典総合研究所語彙検索を使用。

<http://www.genji.co.jp/kensaku.htm>

(22) 前注(21)に同じ。

(23) 東京大学史料編纂所古記録フルテキストデータベースを使用。
<https://www.ap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

(24) 長和五年八月二十六日条
新齋宮入諸司料編進進 仍皇太后宮大夫編百五十疋借渡

(25) 前注(23)に同じ。

【史料典拠一覧】

浅見和彦『新編日本古典文学全集51 十訓抄』小学館、一九九七年。

阿部秋生『新編日本古典文学全集21 源氏物語』小学館、一九九五年。

片桐洋一『新編日本古典文学全集12 伊勢物語』小学館、一九九四年。

黒板勝美『公卿補任』吉川弘文館、二〇〇一年。

橘健二、加藤静子『新編日本古典文学全集34 大鏡』小学館、一九九六年。

東京大学史料編纂所『大日本古記録 小右記』岩波書店、一九八七年。

東京大学史料編纂所『大日本古記録 御堂関白記』岩波書店、一九八四年。

山中裕『新編日本古典文学全集31 栄花物語』小学館、一九九五年。

山中裕『新編日本古典文学全集32 栄花物語』小学館、一九九五年。

七年。

山中裕『新編日本古典文学全集』33 栄花物語、小学館、一九九八年。

山中裕『御堂関白記全註釈』高科書店、一九八九年。

【参考文献一覽】（五十音順）

榎村寛之『伊勢神宮の歴史と文化』塙書房、二一九九年。

榎村寛之『律令天皇制祭祀の研究』塙書房、一九九六年。

片桐洋一『伊勢物語古注釈大成第三卷』笠間書院、二一九八年。

片桐洋一『新編日本古典文学全集』12 大和物語、小学館、一九九四年。

四年。

河北騰『大鏡全注釈』明治書院、二一九八年。

木船重昭『敦忠集注釈』大学堂書店、一九八六年。

倉本一宏『現代語訳 小右記』吉川弘文館、二一九五年。

黒板勝美『新訂増補国史大系第六十卷下 尊卑分脈第四篇』吉川弘文館、二一九一年。

弘文館、二一九一年。

高橋由記『「栄花物語」における皇女の結婚』『新栄花物語研究』

風間書房、二一九二年。

塙保己一『群書類従第五輯 系譜・伝・官職部』続群書類従完成

会、一九七九年。

原榎子『斎王物語の形成』『伊勢物語』と恬子内親王、法政大

学大学院紀要、五七号、二一九六年。

服藤早苗『平安時代 王朝を支えた皇女』『歴史のなかの皇女た

ち』小学館、二一九二年。

明和町史編さん委員会『明和町史 斎宮編』明和町、二一九五年。

森本茂『伊勢物語全注釈』大学堂書店、一九八一年。

安江良介『新日本古典文学大系』8 後拾遺和歌集、岩波書店、一

九九四年。

山中裕『人物叢書新装版 藤原道長』吉川弘文館、二一九八年。

山中裕『御堂関白記全註釈』高科書店、一九八七年。

山中裕『御堂関白記全註釈』思文閣出版、二一九三年。

（中京大学文学部在学生）